公園歴程

2012年詩十編

金色の螢

金色の螢は明かりを灯す必要がない
そこにいるだけで四囲を浮かび上がらせる
おのれを視認させるか否かは本質ではない
だから足下に影が落ちることにも興味はなかった

翼が疲弊し羽先のふちがほころび始めた頃より
太陽の独り言に聞き耳を立て
自分自身の意義を黙考した
誰かが誰かを貶める声を遠くに聞いた

闇の伸長を意識しだした螢から金の光は失せていった
すべてがすべて無かったと
それが真理と帰結せざるを得ないような
夜が始まっていた

やがて螢は動けなくなり、時間とともに朽ち始めたが
もう何も考えることもない
へたりこんで接地してしまうと
影がなくなることを知った

風猫

北風の強い夕方
いつものように曲がり角の自販機でコーヒーを買う
腰を曲げて缶を取り出す合間
陰から現れた黒猫がジーンズの脛にすり寄ってきた
足下よりその小さな震えが次々届き
私はここから何処へも行けなくなった
そのほのかな暖かさが申し訳なくて
アホのように夕闇に身をゆだねそのまま立ち尽くしていた

何をすればよいのかも
何ができるのかも分からずに
身動き一つとれずにひたすら
この偽善者がこの偽善者がと
自分自身を裁き続ける
誰のためでもなく勝手に生きてきたんだなと気づかされたと思い至った時
猫は何処かへと離れていってしまった

黒信号（震災後一年に）

夕闇の交差点を渡っているさなか、計画停電の幕は開けられた
その瞬間、自転車の後ろに乗っていた娘が叫んだ

黒信号！

明るさを失い、視界が闇に慣れるまで、往来はしばしの戸惑いを見せたが、すぐに何事もなかったように、ゆっくりと動き出す

黒信号！

しかし黒い影は、影じゃない何かに確実に変わってゆく、じわじわと

黒信号は、点滅することもない

明るみに隠されていたものも、やがてそれぞれ現れはじめ、おのおの悠々と動き出すのだろう

黒信号よ

停電が終わり、身包みの一切が剥がされた、何かが辺りに普遍するとか、そんなことが起こることもないのだろう

黒信号よ

だから俺は、ことあるごとに、あの交差点にて瞳を閉じて反復することにしよう。何かが何かであり続けるためのもろさを、点滅すらできない他力の嘆きに代わって、黒・白と、意識のまばたきをし続けよう

雨降り神社

雨降り神社の境内で
スギナの群れに手をかざす
くしくし伸びる斜め先
低い雲まであと少し
小さな祠は道からはずれ
賽銭箱も在りません
砂利からずれたぬかるみで
背伸び子どもがジャラジャラと
鐘を鳴らすも響かない

雨は強弱波立って
一日二日続く様
雨降りスギナは生長し
子どもくぐれるトンネルに
なれば皆みな集いだし
大きな場所になる夢を
緑のままにみれるやも

低い雲まであと少し

木香に閉ざす

敷地の隙間から入り込んだ新築家屋の床下
闇に閉ざされながらも
どこかから青い光の粒子が届く
新しい世界が始まる
屋台骨にしがみつく全てが
希望を語る生命だった

ミミズは土の香を纏い養土の賛歌を歌う
蟻もまた靴底を這い明日の小旅行を夢見る
蜘蛛の巣は未だ無い
地球を支える細い節が不安げながらも光へ向かう

もういいかい
もういいよ

深呼吸して誰を待つか
地表では木の香の飽和した毎日が待っている
光の粒も飽和して太陽になった

光の水

農水期の田圃の勢い
有り余る畦乗り越える
豊かな水流に
手のひらを足裏をかざす子供ら
確認するまでもない宿題
プランクトンの浮き沈みを肉眼で辿り
先週までの涸れた大地の
変貌した姿にはしゃぎまわる
水源は遥か太陽にまで遡るか
地割れなき世界より生まれ
ぬかるみの孤独を全て払い去り
底部の澱みにも光を携えさせて
命を誕生に導いている
街区のとなりに田圃は在り
田圃のとなりに街区は在った

公園歴程

遊具には目もくれず
石を拾ってポケットに
ひなたの地面に並べて
地球の裏側を眺めてみた
午前十時半
反射の強い日差しが強まり
砂塵舞う風も吹き始めた
公園見おろす隣地の小丘に登る
古びた石のベンチに座っていると
次から次へと枯れ葉が降り注いだ
まだまだ昇りゆく太陽の隙間
枝にびっしり着いた新芽と
若い葉脈の川が流れて
この公園は何度も生まれ続けてきたのだ

亀酒

池端の冷たい重石に座りビールを開けた昼さがり
親子亀がおんぶのままに揺らいでた
餌やり禁止ではないようだが
ツマミのたぐいを放り投げるのは躊躇した

亀は音も立てずに泳ぐ
黒い水面をよくみれば
亀のさらに下をゆく魚がいる
無数の鯉の群れだった
しぶきを上げることもなく、音を立てるでもない
しかし水の中で流れを強く起こしているのだろう
水流は常に世界を洗い流し、水面にはいっさい塵は無かった

亀は悠々とただ移動する
池に水の出口はなく入口もまたなかった
亀が何時放たれ、鯉が何時放たれたのかは知らない
円環のなかで閉ざされながらも完璧な生を描きだすものは何なのか

さらに水面に顔を近づけて見てみる
二階建てとなった亀の騎馬を、肩を並べ逞しく支え上げる魚影
やがて浮かび上がる朧ろ太陽のはざまに
自分の顔が現れては消えた

酒は何時の間にかなくなり
酔っているのかどうかも分からなかった
時間の感覚を失うことを夢見てきただけなのかも知れない
しぶきを上げることもなく、音を立てるでもない

振り向くな振り向くな

前へ進んでいたのだけは確か
背後で鳩が飛び立つ音が聞こえた

秋の回忌

台風直下の黒雲は早流れ
雨滴は疎らも粒は大きく
墓地への登り坂はじめじめと
慣れ得ぬ喪服に汗を含ませ靴底を擦った

定刻丁度に親戚衆に合流し
挨拶がすべてであるかのような言葉を交わしつ
順序よくおのおの手を合わす

祖母がいる
祖父がいる

門柱の脇の灌木は今ほどに高くはなかったろうことを思う
すり合わすたびに風を感じた
そこへと繋がる路地も横断歩道も地下鉄も
すべてが私へと結びつく絶え間なき水流
雨は疎らも粒は大きく……

祖母がいた
祖父がいた

飛行機雲

急角度で落ちゆく一筋
夕暮れ近く
オレンジに吸われ
砂の大海に落ちぬともがくか
消滅を願うかのよう

渇いた庭石
痩せたミドリガメ
立ち枯れの南洋樹
潰れた銀杏の匂い

木枯らしは未だ吹かない
十一月の地表より
逃れたいお前は
結局のぼりたいお前

いつまでも見続けていた
影も及ばぬ掌の極北
再生なのか生誕なのか
明けて染まらねば分からぬ日の入りの向こうへ

飛べ

公園歴程（こうえんれきてい）

http://p.booklog.jp/book/62089

著者：井上雅英
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tkmuchzw411/profile

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/62089

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ